大阪の都市教育問題と視学・鈴木治太郎の教育改革
── 鈴木の大阪市視学在任期（1917 ～ 1929年）を中心に ──

石川　衣紀*・髙橋　　智**

今日の学校教育の重要課題として、通常学級在籍の障害や特別ニーズを有する子どもへの特別な教育的配慮の確立が挙げられる。現代の特別ニーズ教育、特別な教育的配慮のあり方を構想するときに、その歴史的系譜を通常教育との関連も含めて検討することが不可欠である。その作業のひとつとして筆者らはこれまで、ビネー式知能測定法の標準化で著名な鈴木治太郎（1875 ～ 1966）の教育論、とくに大阪府師範学校附属小学校における特別教室での取り組みや知能測定法標準化実験、特別学級編制と密接な関係の下に展開された適能教育論を検討してきた。これを踏まえ本研究では、鈴木が大阪市視学であった時期（1917 ～ 1929年）において、大阪市の教育実態に対する鈴木の認識をあきらかにし、そこで具体的にどのような教育的対策を構想したのかを検討する。大正期の大阪市では、急激な産業化や重工業化による深刻な都市問題が生じていた。大阪市の子どもは、都市教育問題に晒されていた。鈴木は劣悪な衛生環境による大阪市の高い死亡率、とりわけ子どもの死亡率に注目した。そこで鈴木は、各学校に専任の医師がつくことを提言し、海外での先駆的な取り組みも紹介している。鈴木は大阪市における二大不就学実態調査を行った。鈴木はこの調査結果について大阪市に報告を終えた後、特別学級編制に着手した。大阪市の特別学級編制は鈴木の主導のもとに展開され、特別学級の運営方法や運営方針は、知能測定法を含む鈴木の適能教育論の影響を強く受けていた。

Key words

鈴木治太郎、大阪市視学、都市教育問題、適能教育論、特別学級編制

*東京学芸大学大学院特別支援教育専攻
**発達支援講座